

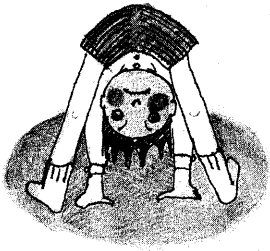
〈書評〉

菊池ふじの監修 土屋とく編

『倉橋惣三「保育法」講義録』

(フレールベル館)

飯島婦佐子



この本は、昭和九年四月から昭和十年三月までの東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）保育実習科における講義の記録である。先生の講義を聴いた学生のノートに基づいたもので、行間から先生の保育に対する熱意が伝わってくる。この本は先生の三十年にわたる保育の実践と理論を踏まえた講義を記したもので、もっとも充実した時期の講義である。この講義録は、「保育の原理を示す第一章幼稚園と第二章保育法の原理」、「保育者はどうあるべきかを示す第三章保育法の原則」、「実践記録ともいべき第四章保育方案、第五章保育項目」より成る。

次にあげるいくつかの問題点からこの本が現在の世の中に出る意義を考えてみよう。

ところで、近年、人の発達の領域では、従来、考えられている以上に、人は生涯にわたって変化し、幼児期の劣悪な環境条件を克服していく復元力をもっていることを実証している資料が出ている。こ

のような研究の蓄積にもかかわらず、人の幼児期がその後の認知機能や人格の発達に重要な影響があることを多くの人が認めている。幼児教育の問題は古くて新しい問題といえよう。

1. 現代社会と倉橋理論

第二次世界大戦後の日本の社会は、G・N・Pをあげるため多くの努力をした。その過程で産業構造は変化し、農業、漁業、林業に従事する人口は減少し、工場や会社で働く人口が増加した。このような場所で職を得るためには高い学歴を必要とし、高等学校や大学への進学率が増加した。一流企業に入るためには、一流大学へという動きは、若い両親にも影響を与え、できるだけ早い時期に学校に関する知識や技術を教えることが大切であるという風潮が生まれた。この社会的要請を受けてどの子どもも音楽リズム、絵画製作などのあらゆる領域の力を平均的に伸ばすために「構造化したカリキュラム」による

教育が望ましいと考える人が多くみられた。この幼稚園では、保育者の指導のもとに子どもが従順に行動することを望んだ。

倉橋理論は、五十年前前に提案された。この保育法がなぜ現在必要なのだろうか。この保育法では、「保育者との情愛的な結びつきから情動の安定を得て、それに基づいて仲間との具体的な生活の中で自発性を伸ばし人格の基礎をつくること」を大切に考えている。このような人格の基礎ができあがっていれば、児童期、青年期に出会うストレスを克服していく力もついて来る。現代、青年期に母子共生に原因があると思われる家庭内暴力、思春期やせ症、もえつき症候群などの病理学的現象が指摘されている。この現象を家庭生活を含めた幼児期からの日本社会の問題が、青年期になって現れてきたと指摘する人もいる。老人、子ども、病人、障害者など弱い立場の人々が生活しやすい社会が精神的に豊かな社会であるが日本社会は果たしてどうだろうか。この

視点からもう一度保育の原点にかえて幼児期の問題を考える時期なのかもしれない。

2. 方法論への新しい道

子どもの心を自然科学的な方法を用いて見ることは、現代の心理学の主流となっている。子どもの遊びを一学期には一回二十分観察して、「ひとり遊び」、「同性ペア」、「同性集団」、といったカテゴリーにわけて分析した。このような方法でいくつか論文を書いているうちに何か誤りを犯しているように気になった。統計という確率的モデルを使って処理した結果は一体何を意味しているのだろうか。たしかに、平均のモデルを見つけているのであるが、ひとりひとりの子どもの姿がまったく見えてこないのである。そうした処理の仕方よりも子どものやりとりのプロトコルをひとつひとつ分析して、その時子どもの心の中で何が生じているか考察したほうが子どもの生活をより深く把握できる。「子ども

と交わる生活感覚」こそ大切ではなからうか。これは、現象学的方法であり、今後の研究方法の一つの発展の方向であると思う。もう一度、子どもをよく観ることが問われている。

3. 誘導保育論を中心とした展開

倉橋理論を論じる時にしばしば充実指導は理解できると誘導保育を理解することは非常にむずかしいという話を耳にする。今回のノートはこの難解といわれる誘導保育をよく説明してあるのが特徴である。保育者となる学生を相手にした講義であるため、具体的な例をひきながら説いている。

保育の第一原則は間接教育である。これは、設備や材料を十分に用意して子どもを待つことである。物を用意するだけでなく子どもを迎える心の用意もすることである。実際に実践園を訪問すると、動物、遊具、本、大工道具、がらくたなどがそれぞれのコーナーに並べてある。これらのものは子どもが

来るのを待っているように置いてある。どらえもんやキティのついたタオルをかけておき、手を拭きなさいと言わなくても自然に手を拭きたくなるようにしてある。

第二原則は相互教育である。これは、保育者は歌舞伎の黒子のように目立たない存在で、子ども同士の相互作用を大切にすることを意味している。

第三原則は共鳴の原則である。これを現代のことばで説明すると、子どもが愛着をもっている大人に受容されて嬉しさと安心感を得て自分の行動の確認ができる事を意味している。「子どもの前に行ったら、自分という考えを捨ててしまふ。捨ててから子どもに接しようとするれば、無理なことである。何しろ子どもに対して、可愛さを感じずれば良い。そして子どもに接して、子どもを自分の心の中に入れてしまふ。そうすれば、初めて良き共鳴が出来るのである。」(p. 116)

第四原則は生活による誘導の原則である。子ども

は、保育者の生活を観てそれをしたくなる。また、保育者が子どもと一緒に何かをすることも子どもを動機づけることになる。保育者が人形の家を作っている。それを見て子どもは、自分も何かを人形にしたいくなる。

4. 保育項目 製作、談話、観察、遊戯、唱歌の意味すること

保育方案をたてる時に保育項目にとらわれやすくなるがこれは誤りであって、子どもの遊びの中に統一的に含むことが望ましい。

製作では、「子どもの内からの自発行動を大切に、材料、道具を十分用意し、保育者の作った作品と製作過程を見せる芸術的誘導」と「目的をもち、自己の必要のために作る産業的誘導」の二点を強調している。大切なことは、子どもの集中力などの人格を育てることである。保育者は、子どもの作るという気持ちを助けることが大切である。

観察では、対象に対する単なる知識を養うというより弁別、比較と鑑賞力を養うことを説いている。

談話では、表現活動と想像活動を養い保育者は子どもの心の引き出し役であると考えている。

音楽や遊戯も歌いたい表現したいという気持ちを大切にすることを強調している。このことは、人格の基礎をつくることが大切であることを意味している。

この本の最後に土屋とく先生の具体的に明解な解説が載せてある。この本の概要を把握したい方は、はじめにこの解説から読んだ方が理解しやすいと思う。

数概念の調査をしていた私が、新庄よし子先生が始められた倉橋理論の実践園と出会いその保育の温かさと自然さに魅せられてから長い月日が経っている。日本の保育の原点ともいえる倉橋先生の保育論に出会いその実践園で長い間調査と観察ができたこ

とは、大きな喜びである。倉橋先生の保育に接することによって前よりもすこしずつ成長しているような気がする。現在、大学で学生と接している時に相手の気持ちと共感したり、受容したりしているのに気が付いて驚くことがある。幼児教育だけでなく、人間理解につながる何かを倉橋理論の中に感じている。

(明星大学)